

腕士郎をプリヤ士郎に憑依させたら

Rin/さすらいの人

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

セイバーオルタとの闘いで命が尽きた衛宮士郎
だが気づいたら

若返っていて病院にいた

しかし見覚えがあつた

その時、現れた人とは…

一体何宮何嗣なんだ…

ちなみに、1様最後まで頑張ってみます

応援お願いします

目次

番外編、ネタバレ

キャラ設定(想定)

本編

序章(プロローグ)&1話

2話

3話前編

3話中編

3話後編

第4話

5話

6話前編

6話後編

1

5

10

19

26

33

39

45

52

58

番外編、ネタ帳

キャラ設定（想定）

今作の主人公（笑）

衛宮士郎

詳細

かつて反転した最優の騎士

セイバーと闘い

諸刃の刃、そして最終手段として

アーチャーの腕を使い

相打ちで終わったが士郎は

廃人になり、命を落とした

だが、目を覚ました時病院にいた

そしてある人達が来た

残っている記憶

アーチャーの腕を移植し

そしてセイバーと闘い、相打ちで命を落とした

アーチャーと??い

自分の心象世界即ち無??の??製

を使えるようになり

そして

ギッ??ユとの闘いで生き残った

そして

遠??と一緒に??塔に行き、??術を学んだ

ここで記憶は途切れている

使用魔術

・ 投影魔術

衛宮士郎といえばこれっ！つて言えるものである

この投影魔術は1度投影したら壊れるか自分の意思で壊すか以外ではなくならない

しかし基本骨子がしつかり出来てないと贗作以下になる
のでいつも

憑依経験などをして基本骨子もしつかりしてから投影している
と思う

・ 強化魔術

多分普通の強化魔術

ものに強化にすれば固くなるし

自分にも強化は出来るがあまりにしない

・ 解析魔術

かつて衛宮士郎がストーブを治した時に使ったと思われる魔術だ
と思われる

ちなみに、実際にあるかは分からない

投影物

干将・莫耶

白黒の双剣別名夫婦剣とも言われる

中国の鍛冶職人が作ったと言われている

無銘の剣

所謂、シヨートソードのようなもの

勝利すべき黄金の剣

かつてある王が持っていたとされる選定の剣

熾天覆う七つの円環

トロイア戦争にてアイアスが使用した盾。一枚一枚が古の城壁と
同等の防御力を持つ

真名を解放すると7枚の花びらが現れる

偽・螺旋剣Ⅰ（オリジナル）

本物より細いが剣である

真名を解放すると刃がドリル状に動き始める

偽・螺旋剣ⅠⅠ

アーチャーも使ったやつ

虹霓剣

凄く、大きいです…

使い方は本家と同じ感じ

刺し穿つ死棘の槍（あまり投影はしない）

刺したら

心臓を狙うと言う経過だけが、刺された、という結果だけが残る

スつごおーい槍

是・射殺す百頭

バーサーカー、ヘラクレスが使っていた岩のような大剣

エクスカリバー・フェイク
全て偽りの黄金の剣

衛宮士郎がかつてセイバーが使っていた剣を

自分の実力等に合わせた剣

ある無銘の英霊と違い固有結界でないと投影できない、そして捨て身のわざと言う訳では無い

イリヤスフィール・フォン・アインツベルン

今作では小学生である

そして衛宮士郎の妹である

魔術礼装であるカレイドステッキのルビーと契約している。

使用魔術（ルビーを介して）

強化魔術

防御魔術（？）

強化魔術は自身に付与させ強化される

防御魔術は物理保護が可能ランク的にはA相当

(防御魔術でいいかな?)

なかったとしたらオリジナルと書いていで行きましょう)

詳細

小??杯

聖??戦??で大??杯の孔を開く役割を持っている

そして次の聖??戦??

のために調整されるのだがその前に連れていったので
調整を加えられていない

美遊・エーデルフェルト

謎の少女

どこから来たのか分からない

ルヴィアゼリツタ・エーデルフェルトの義妹

魔術礼装であるカレイドステッキのサファイア

と契約している

使用魔術

強化魔術

防御魔術(?)

置??魔術

強化、防御に関しては上と同じである

置??魔術

自分では自覚はしていないものの使えることは使える

だが、自覚していないため使う事は不可能に近いだろう

詳細

天然の??杯

産まれた時から既に調整済みの??杯を有している

本編

序章（プロローグ）& 1話

「…強くなりましたね…シロウ…」

反転した最優の騎士『セイバー』が問う

「セイ…バ…」

アーチャーの腕を酷使して廃人と化した衛宮士郎が言った

そして、衛宮士郎は意識を失った

【??】

(…ここは…)

ガバツ「びよ、病院…?」

ここは病院であった

そして、衛宮士郎はここに見覚えがあつた

だがその時

ガラガラガラ

「やあ、君が○○士郎君かな？」

僕の名は、衛宮切嗣

突然で申し訳ないんだけど

このまま孤児院に行くの誰も知らない僕達について行くの
どっちがいいかな？」

と、少しばかり笑顔を見せる

目は死んでいるが

(じいさん…これで、俺の罪を償えて行けるなら…)

「ああ、着いて行くよ」

「そうかい、わかったよ

これからよろしくね、士郎」

と、また笑顔を見せる

目は死んでいるが

【多分10年後】

ピピピピッピピピピッ

カチヤン「…」ググツ

「よし…始めるか」

AM 6:30

カタンカチヤン

ガチャ

「おはようございます…」

「ああおはよう、セラ」

「つて…シロウまたやりましたね！

今日の当番は私って言いましたよね！」

と、セラは怒る

「だ、だけど、暇だったんだよ…」

「だからつてここまで作りますか！」

そう、作ったものは朝食の定番と言える

味噌汁、焼き鮭、ご飯等々の和食であった

「というより、なぜあなたが朝食を作るのですか！

そういうのは…まあいいです、シロウには言っても

やりますからね」

と、もう手遅れというかのように、いや確かに手遅れだが

説教(?)をやめる

「ま、まあわかったよセラ

あつそうだ、イリヤを起こさなきゃヤバいんじゃないか？」

「あつそうですね、では起こして…」「いや起こしてくるよ」「…：分かりました、シロウあなたに任せます」

ガチャ

「おーいイリヤー、起きろー」

「うくん…あと5分…」

「はあ、」シャーッ！

「うわああああ！

ちよ、何するの！お兄ちゃん！」

「仕方ないだろう？起きなかつたんだからな」

「そ、そうだけども…」

パチン「ま、それはいい、早く下に行くぞ」

「わ、わかつたよ」

タツタツタツ

「よし、行くか」

キラッ☆

その時、イリヤのベットの隣が一瞬光った

「ん？なんだこれ」

ペラ「…!?あ、アーチャーのカード？」

「お兄ちやあん？」

「あ、ああ今行くー！」がさ

【学校及び、授業中】

「ある騎士は王に言った、それはなんだ？」

「そうだな……衛宮、答えてみる」

（あのカード何だったんだ…魔力を少しだが帯びていた

この世界では、サーヴァントの代わりにあのカードを使っているのか？

いや、イリヤなら、バーサーカーを使用するはずだとしたらなぜ…）

「おい！衛宮！」

「え？あつ！はい！」

「この答えはなんだ」

「あー…えつと…わ、分かりません…」

「…はあ、わかった、なら…田所、答えてみる」

「えつと…「王には人の心が分からない」ですかねえ…」

「正解だ」

【放課後】

「衛宮、今日はどうしたのだ…」

「ああ、ちよつと考え事を」

「うむ、そうかまあ分からぬところがあれば言うが良い、」

「ああ、済まない一成」

「うぬ、構わぬ」

「おい衛宮あゝ」

「ん？どうした慎二」

「校門前に衛宮の妹が来てたから衛宮を呼ぼうとしてきたんだ」

「そうか！ありがとな！慎二！

今度、何か奢るよー！」

「ああ！楽しみに待ってるよ！」

タツタツタツ

「はあ、はあ、おまたせイリヤ」

「いや、いいよ！」

「つてことがあつてね！」

「そうか、良かったじゃないか」

「うん！」

あつそうだった今日ミユの家で遊ぼうと、思ってたいいかな？」

「ああ、人様の家なんだ迷惑かけないようにな？」

「うん！」

【数時間後】

「イリヤさん遅いですね、」

「ああ、そうだな」

(なにか嫌な予感がするな…)

「よし、セラ」

「どうしましたか？」

「ちよつと探してくる」

その間留守番を頼む」

「わかりました、お気をつけを」

「ああ、」

ガチャバタン

t o b e c o n t i n u e d …

2話

「ハアハア……ここにも居ない……」

タツタツタツ「ハアハア……ここにも居ない……
一体どこに行つたんだ……」

【学校付近】

「まさか……こんな所にいるわけないよな？」

と、思っていた

だが、その期待を裏切る結末であつた

「イリヤ、始めてちょうだい」

「は、はい」

「な、と、遠坂？」ジャンプ!「ボソツ

「えっと……離界！」

と言うとイリヤ、もう1人の少女(?)は瞬きする間に
消えて居なくなつていた

「瞬間移動？」

そんなことが……

いやこれは……」

と、言ったが次の瞬間

「並行世界……」

なぜこのような言葉が出てきたのかは知らないが

「……仮に並行世界だとしたら
どうするか……」

よし、一か八か」

と、いい

ある策を決行しようとした

だが、それは成功率が以上に低い

しかも、性質が合うか分からない状態だ

だとしても

「やるしかないよな？」

「よし、トレース・オン!投影開始！」

と、言った瞬間

歪剣を投影した

「よし、行くぞ！」

ザシユツ

バチツバチツバチツバチツ

「せ、成功か？」

「行くか！」

その時、投影したのは破戒ルすルべきッ全ての符レであった

【鏡面界】

「行きなさい！イリヤ！」

「え？えつと…フオ…フオイア!砲撃！」

と言うとイリヤはステッキから魔力弾を黒化英霊に飛ばした

「っ！、」

「よし、そのままやりなさい！」

「は、はい！」

と言いままた撃つ

しかし、黒化英霊も攻撃を始めた

「な、まさか宝具を撃つ気ね！」

イリヤ、下がりなさい！」

「ふえ？うわああああ！」

「イリヤ、下がりにさい！」

「な、イリヤ！」

と、言った時、

アーチャーのクラスカードが士郎と共鳴をしていた

「…アーチャーのカード…力を貸してくれるのか…」

「行くぞ、アーチャー…トレース・オン!同調開始！」

と言うと士郎は姿を変えた

『騎英の手綱!』

と言うとベガサスを連想させる動物に乗り、突っ込んでくる

「イリヤ! 守りにさい!」

黒化英霊英霊はイリヤに突っ込む

だが、その時、救世主が現れた

「I I 体 a m は t h e 剣 b o n e で o f 出 m y 来 s w o r d で i い s w o r d る

熾天覆う七つの円環!」

と言うと、赤い花のような盾が7つ現れた

「誰?!」

「お、お兄ちゃん?!」

「イリヤ、あとは任せろ」

と言うと

「I 我 a m が t h e 骨 b o n e 子 o f は m y 捻 s w o r d れ

と言うとドリル型の剣が投影される

「カラドボルド!偽・螺旋剣I!」

それを黒化英霊に突き刺した

(済まない、ライダー…)
ブローケンファンタズム
「壊れた幻想」

と、言うのと投影した武器は爆発した
ドゴーンツッ!

「シ、ロウ…」

「!ラ、ライダー!」

「さく、ら
を」

と、言いかけた瞬間

「ランサー限定展開
刺し穿つ死棘の槍」

と言い横入りしてした少女は黒化英霊もとい、ライダーの心臓、霊核を潰した

消滅していく間

ライダーは笑顔であった

「てめえ!!」

衛宮士郎は干将莫耶を投影し、
ガキン! 「っ!」

『美遊様! そろそろ切れます!』

「…わかった、」

「逃がすかあッ!」

投影した干将莫耶を飛ばす構えをした

その時、衛宮士郎の顔が見えた

「お、お兄ちゃん…?」
と、言い涙を流す

「……は?」

と言うと、士郎は干将莫耶を下ろし、消した
そして美遊は姿を戻し

抱きつ「会いたかった…」

士郎に抱きつく

「ど、ど、ど、どうなっているだ?」(混乱中)

ピシッ

「ん? な、なんだ?」

『黒化英霊を倒したことによって鏡面界が崩れ始めているんです

よー』

「ちよっ!」

それ早く言いなさいよ!」

「そうですわよ!」

『はいはい、わかりましたよー

じゃあイリヤさん行きますよー』

『う、うん!』

「それと君、後で話は聞くわよ」

「あ、ああ」

『じゃあ行きますよー』

ジャンプ!
「離界!」

【なんやかんやでルヴィア邸】

「…えーと、どうして、拘束されているのでしょうか?」

「そんなの当たり前じゃない」

「ねえ？」

「そうですね、」

「なぜ、あなたがクラスカードを持っていて、転身してる(のよ！)(の
ですわー)！」

「一つづつ説明する」

「そういうと士郎はカードはイリヤの部屋から見つけたもの
転身出来たのはカードと俺が共鳴したことを

説明した

「そう、まあ、何となくわかったわ」

「そうか、良かった…」

と、ホッとした士郎

「はい」

「え？」

「だからはい！」

「クラスカード、返しなさい！」

「け、けど、」

「安心なさいあなたがいなくても支障はないわ」

「いや、こいつは渡せない」
クラスカード

「はあ？どういことよ」

「俺にもやらなくちや行けないことがある」

「それは私たちに関係」ある「え？」

「この先、強敵がいるはずだ

そして俺は…」

「そいつらの弱点を知っている」

「！、それ、本当ね」

「ああ、本当だ」

「そう、わかりました、私たちはあなたの言葉を信じます

そしてあなたもカード回収をすることを許可しましょう」

「ああ、ありがたい」

「ええ、それとルヴィア、なにかこいつに話すことはあるの?」

「特にはないですけど、しいていうなら、アーチャーのカード以外にも転身できるのかしら?」

「分からないが多分無理だ」

「それはどうしてなのかしら?」

「直感でしかないが俺の体とアーチャーのカードの相性が良すぎるのか、それ以外は受け付けない感じがする」

「そう、その割には結構詳しく言うのね」

「…」

「まあ、いいですわ、あなたの体、平気なのかしら?」

「え?ああ、平気だが」

「違うわ!魔術回路よ!」

「魔術回路?さあ、分からないが」

(魔術回路…その存在を忘れていた)

「……魔術回路本数27本、別に異常は見当たらないですわね」

「そうか、良かった」

「そうですわね、

まあそれはいいのですけど

名前はなんて言うのかしら?」

「衛宮…衛宮士郎だ」

「衛宮士郎…シロウ…ああ!言い難いわね!シエロ!」

いいですわね!

協力するのですからよろしくお願いしますわシエロ」

「ああ、よろしく頼む…えっと…ルヴィアさん?」

「よろしくお願いしますわ

まあそれはそれと

なぜミュはシエロ！にベツタリなのかしら！」

「何故って、久々のお兄ちゃんに再会できたのでハグをしているのですけども…」

と、問う美遊である

「あのな…美遊？…俺は君のお兄ちゃんじゃないんだ」「え、」

うそつ、と言わんばかりの顔をする美遊であつた

「美遊ちゃん、君のお兄ちゃんと俺は似てるかもしれない

だが、こんなやつだったのか？」

「…違うかも…」

「君のお兄ちゃんの見た目は似ている、もしかしたら他人の空似かもしれない

だが、俺は似てるだけの他人だ」

「そうでしたね…土郎さん」

「だが、君が良ければお兄ちゃんって呼んでも構わないぞ？」

「…！わかりまし…わかつた、お兄ちゃん！」

「ああ…」

だ、だがあまり人の前ではやめてくれると助かる」

「はい、わかりました」

(コロツと変わるな)

その時、見ていた子がいた

「お兄ちゃん…」

「イ、イリヤ?!」

「私はもういいの?」

「そ、そういうことじゃないぞ?」

「…でも…」

「はあ、わかつた、イリヤ、」

「!」

「おいで」

と言い腕を広げる

「お兄ちゃん!」

そして、土郎に抱きつく

イメージすると

左に美遊、右にイリヤ

「…衛宮くん…すごいわね…」

「今回ばかりはトウサカリンあなたの言う通りですわね」

「それじゃあ俺たちは帰るぞ?」

「ええ、何かまたあつた呼ぶわ」

「ああ、そうしてくれ」

「ああ、お兄ちゃん…」

別れを惜しんでいる美遊がいた

「美遊、またここに来る

なんなら遊びに来てくれ

イリヤ、多分喜ぶぞ」

「は、はいわかりました土郎さん」

「ああ、」

(突然変わったな)

「それじゃあ」

「帰るぞ?イリヤ」

「うん…」

と言い手を繋ぎ、帰る兄妹が居た

t o b e c o n t i n u e d …

3 話前編

「…よく寝た…」

と、起き上がる衛宮士郎

「今、何時だ？」

と言い、時間を確認する

デアドーン！（絶望）

「は、は、8時?!」

だっ！だっ！

「はあ、はあ、やばいやばい！」

「ど、どうしましたか？シロウ？」

制服を着て」

反応をするセラ

「何って、はあ学校だよ！」

「え？」

「え？」

と言い顔を見合わせる士郎とセラ

「勘違い出なければいいのですが

今日、土曜日ですよ？シロウ」

「…嘘でしょ？」

「ちよっとお待ちを…

…はい、今日は土曜日です」

「なんでさアアアアアッ！」

と、叫ぶ士郎

そして近所迷惑になり近所に謝りに行く士郎であった

「なんて言ううっかりだ、遠坂のが移ったのかな？」

と小さい声で言う士郎であるが

その時、

「誰が、うっかりなのかしら？」

赤^{遠坂}悪魔^標の聲が聞こえてくるのであった

「ととと遠坂?!

いつからそこに?!

「うっかりってところからよ」

「結構序盤じゃないか！」

「まあ、それはいいわ

次の黒化英霊の討伐作戦を立てるために探してたのよ」

「そうか、よし行くか」

「もとより、そのつもりよ」

【ルヴィア邸】

「という事で次の黒化英霊の討伐に向けて

作戦を立てるわ」

「なあ遠坂、次の黒化英霊のタイプはどんなタイプだ？」

「…まだ、わかってないけど

わかっていることは大量の魔力を保有してるわ」

(大量の魔力…キャスター…?)

だとしたら、)

「つてことで衛宮くん、なにかわかった？」

「だとしたら…まずい…」

「何がまずいのよ」

「え？こ、声、漏れてた？」

「普通に漏れていましたわ」

「つてより、まずいって何がまずいのよ」

「恐らく相手はキャスターだ」

多分、神代の魔術師だ」

「神代の魔術?!」

「ああ、今の魔術じゃ、勝てない可能性が高い」

「じゃあどうしろと…」

頭を抱える凜

「だが、一つだけ策がある」

だが、これは実質運任せだ

キャスターは魔術には長けている

だが、身体能力はそこまで高くない

そして魔術を使えば隙ができるはずだ

そこを叩くしかない」

「わかったわ

ありがとう、衛宮くん」

「いや、俺はこれくらいのことしか出来ないから」

「つて言うことでイリヤ、美遊、作戦はわかったかしら？」

「は、はいわかりました！」

「わかりました」

「そう、じゃあ夜冬樹大橋に来てちょうだい」

「わかりました！」

「ああ、わかった

だが、

その前に美遊、離れてくれないか？」

「やだ、離れない」

「うーん…どうしたものか…」

「美遊…シエロが困ってますの、離れなさい」

「っ、ルヴィアさんでも、それは出来ません」

「わかった、美遊」

「ん？何？お兄ちゃん」

「今、離れてくれるなら、今度泊まりに来てくれてもいいぞ？」

「わかった、離れる」ばっ

(離れるの早っ！)

【冬木大橋】

「じゃあイリヤ、始めなさい」

「美遊、始めるのですわ」

「はい、わかりました、凜さん！」

「了解です」

『限定次元反射炉形成！』

と、ルビーとサファイアの声が重なる

『境界回廊一部反転！』

『ジャンプ!離界！』

と言うと目の前が明るくなり、見えなくなった

【鏡面界】

「：ねえ、これって、」

「これはまさか…」

「準備万端だったって言うこと?」

そう、黒化英霊、もとより、キャスターは魔方陣の用意は完了して
いた

「イリヤ!美遊、避ける!」

「え?」

ドゴーンツ!

「がハッ、」バタン

「お兄ちゃん!」

「まずいわ…」

イリヤ!、美遊、撤退なさい!」

「わかりました!」

「離界!」

【???

(ここは…)

衛宮士郎は白く、何も無い場所にいた

「まさか、ここに干渉してくるとはな」

「アー、チャー」

「久しいな衛宮士郎」

そうそこに居たのは^{英霊}アーチャー^{エミヤ}であった

「なぜ、俺がここに…」

「さあな、だがこれだけ言っておこう、

早く戻れ、妹が悲しんでるぞ」

その時、体からチリのようなものが出てくる

「…早く戻れ、お前の顔など見たくもない」

「…そうかよ」

シユユワン

「……………やん」

(…なんだ…)

「……………ちゃん」

(もう、いいだろ…)

「…にいちゃん」

(もう、寝かせて…くれ)

「お兄ちゃん！」

「はっ！」

「…は…う…」

「良かった…凛さん！お兄ちゃんが目を覚ましました！」

「衛宮くん！目を覚ましたのね！」

「ああ済まない、遠坂」

と、頭を下げる

「いや、いいのよ」

「そうか、良かった」

それはいいんだが、どうしてルヴィアさんはあんなに悔しがっているんだ？」

「それはね…」

と、士郎が気絶してる間のことを説明していた

「そ、そんなことが起きてたのか…」

(たしかにイリヤは想像力は高いからな)

「そういえばキャスターはどうするだ？」

「明日あたりにキャスターの対策を考えて行くは」

「そうか、よし、今日は一時撤退か…」

「ええ、そうね、だけど早いうちに決めないとやばいわ」

「そうか、じゃあ明日くらいにまたルヴィアさんの自宅に行く」

「ええ、わかったは」

「時間帯はおよそ、12時くらいだと思っわ」

「わかった、それくらいの時間帯にまた行かせてもらう」

「と言い解散した」

t o b e c o n t i n u e d …

3話中編

「イリヤ、構えなさい」

「美遊、始めなさい」

と、遠坂とルヴィアさんはイリヤ、美遊に伝える

「はい（！）」

と、言うのと

「ルビー！」

『まっかせてください！』

「サファイア」

『はい！美遊様』

『限定次元反射炉形成！』

と、言い、地面に魔方陣が展開される

『境界回廊一部反転』

「ジャンプ！離界！」

と、言い、目の前が光る

【鏡面界】

「イリヤ！、美遊！構えなさい！」

「はい！」

「イリヤ、作戦は……でいい？」

「わかった！」

そして、ステッキに魔力を集中して

「フォイア！砲撃！」

「キャスター黒化英霊に

魔力弾を放つ

しかし、それはすぐに防がれる、いや打ち消された

だが、それは

「全速力、シュート……速射……！」

「囮であつた」

ドバゴオオンツ

と、轟音を鳴らし、ガラ空きになったキャスターの体に
当たる

「ツ！」

「すごい……！」

「……衛宮くん？」

「行かないのかしら？」

「あ、ああ行くよ」

「と言いつつ、カードを出す」

「トレース・オン！同調・開始！」

「と言うと本来は姿が変わるが」

ドクン！「ぐああツ！」ボタン！

「衛宮くん！」

「??？」

「問う、あなたが私のマスターか」

「誰かに負けるのは良い……だが、自分には負けられない！」

「勘違いしていた俺は剣を作るのではなく、剣を内包する世界を作る
んだ！」

「認めよう……今はお前の方が……」

「強い！」

「させるかあツ！」

…なんだ、この記憶…

「衛宮くん！」

「遠…：坂？」

士郎は目を覚ます

「キャスターは…？」

「キャスターなら、イリヤと美遊が倒したわ」

「良かった…：」

と、涙を浮かべる

「良くないわよ！

つてより衛宮くん体の具合は悪くないの!？」

「え？特にないが」

「はあ、呆れた…

腕、見てみなさい」

士郎は腕を見る

「…なんでさ」

そう、士郎腕は少しではあるが侵食が始まっている

ガチャン

「お兄ちゃん！」

「良かった、生きてる…」

「お兄ちゃん、お兄ちゃん、お兄ちゃん、お兄ちゃん…」

イリヤは涙を流し、

美遊は名前を連呼する

「イ、イリヤ？、美遊？

少し落ち着かないか？」

【数分後】

「落ち着いたか？」

「うん、落ち着いた」

「イリヤ、美遊…済まない…」

「別に平気だよ！」

「うん、怒ってないよ」

「そうか、」

「早速だけどいいかしら？」

「ああ、構わない」

「衛宮くんは知らないだろうけどキャスターを倒した後

もう一人来たのよ」

「何？それは本当か？」

「ええ、本当よ」

「な、なら！」

と、立ち上がる

「そんな身体で何が出来るの？」

もしかしたら、使えないかもしれないのよ？」

「だからって行かない訳には行かない」

「：はあ、わかっただいいわよ、だけど使えなかったら強制的に帰します」

「わかった、それでいい」

「じゃあ、明日ここに集合よ

ルヴィア、それでいいのかしら？」

「それでいいのですわよ」

「じゃあ、また明日」

ガチャバタン

と、いい帰る

【数時間後】 【深夜】

「今なら平気かな？」

ガチャ…

【凄い…森】

「よし、やるか」

ばっ、「同調・開始！」
トレス・オン!

「よし、次だ」

息を吸い、吐く

「投影、開始」
トレス・オン

「創造理念、鑑定」

「創造の理念を鑑定し、

「基本骨子、想定」

基本となる骨子を想定し、
構成された材質を複製し、

「一仮定完了。是、即無也《オールカット

クリアゼロ」

制作に及ぶ技術を模倣し、

あらゆる工程を凌駕し尽くす

「よし、成功

ふん！」ブウン

「ふっ！はっ！」

「よし、これくらいでいいか」

「そんなにしても意味は無い

帰るか」

そして士郎は家に戻る

【次のひい〜(翌日)】

「…よし、皆集まったわね?」

「集まったも何もここは私の家ですの」

「はい!」

と、士郎の右腕に絡みつく

「はい」

と、士郎の左腕に絡みつく

「…はい」

と、挟まれ、元気を失った士郎であった

「…そ、それでは黒化英霊討伐作戦を立てるわ
なにか質問がある人」

「「…」」

「ないわね?」

それじゃあ、特徴も言うわ

まず、剣を持っていたわ

そして次に黒いバイザーをしていたわ」

(黒いバイザーに剣…)

「セイバーか」

「そう、」

「早速だけどいいかしら?」

「ああ、セイバーは対魔力を持っているため

魔力弾は効かないだから俺のカードかランサーの宝具で決めるし
かないな」

「わかったわ」

「それでは夜になり次第行くわよ」

「そ、そうか」

それとイリヤ、美遊、離れてくれないか?」

「嫌だ、絶対に嫌」ブンブン

と言い首を横に振る

「なごびやあ…」

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
…

3 話後編

「よし、行くわよ」

と、遠坂はイリヤと、美遊に命令を出す

それを受けてイリヤと、美遊は動く

「離界！」
ジャンプ!

とイリヤと、美遊が言った瞬間、展開した魔方陣は強く光った

【鏡面界】

「うわあ、更地じゃない」

と、鏡面界といえどこの土地の管理者の遠坂は

セイバーがやったと思われる、更地を見る

「ですが、戦いやすくなったのでは？」

と、ルヴィアさんは戦いやすさについて言う

「だが、不意討ちができなくなかないか？」

と、士郎は遠坂と、ルヴィアさんに伝える

「何を言ってるのよ、ランサーの宝具で決めるしかないって言ったんだから

無理に打つ必要は…危ない！」

と、士郎に説明していたのだがその時、セイバーが痺れを切らして

攻撃してきた

「くっ、同調、開始！」
トリス、オン!

と言い、魔術回路を起動させ、アーチャーのカードと自分を同調させ

転身する

「I am the bone of my sword」
我が骨は

魔術回路を最大限に起動して魔力集中をした

そして捻れている剣を出した

それを

「偽・螺旋剣I！」

セイバーに突き刺した

「…っ、」

心臓ではないとはいえ突き刺したのだ、大ダメージとは行かずともダメージは入るはずだ

「美遊！やれ！」

と言いつつ、腕に強化を掛け、偽・螺旋剣Iを引き抜くと同時に美遊の方に飛ばした

「ランサー限定展開」

ランサーのカードをサファイアに重ね、 宝具を出す

その宝具は赤く光り、

「刺し穿つ死棘の槍」

セイバーの心臓に突き刺した

それと同時に、セイバーの体は消えてきているも

「…」スチャ

と、セイバーは剣を構え、

魔力放出を開始する

「わかったわ！その英霊は」

「『約束された……勝利の剣!!』」

「アーサー王伝説のアーサー・ペンドラゴンよ！」

ドウウウンツッ！

セイバーが放った約束された勝利の剣はこちらに向かってくる

(まずい！これじゃあ相打ちで終わる！

なら、)

「I am the bone of my sword」

と言いつつ次は先程とは違く

手を前を突き出している

「熾天覆う…七つの円環！」

と言いつつ赤く燃えているような花びらが6枚投影された

パリン

「くっ、」パリン

リン

(くそっ、耐えてくれ…)

元々熾天覆う七つの円環というのは投擲された槍を止めるのに最適な盾であって剣の猛攻を止められるかと言われたら無理の方が高い

だが士郎は諦めず最後まで、たち続ける

「耐えてくれえええっ！」

パリン

パリン

残すはあと1枚これを耐えれば約束された勝利の剣は止まる

だが、神は許してくれない

パリン

ドウンツ！

威力が弱まったとはいえ宝具レベルの投影を2回もやったんだ、魔力不足で力が入らずそのまま強制解除

「くっ…そっ、」パタン

衛宮士郎は倒れた

それだけではない

遠坂、ルヴィア、イリヤ、美遊達も食らった

だが、イリヤ、美遊は物理保護でダメージを軽減した

しかし士郎はそうとは行かなかった

「お兄ちゃんっ!!」

イリヤは、士郎の所へ行く

しかし衛宮士郎を目を覚まさなかった

そしてイリヤの中には兄である士郎の倒したセイバーを倒したかったのだが、しかし力が足りず倒せない

ドクン(あいつを倒すにはどうしたらいい

お兄ちゃんを倒したあいつが憎い

あいつを倒したい)

と、思う内に

ガチャと、音がイリヤの中でなり、美遊が持っていたはずのランサーのカードを持つていた

ランサー夢 幻 召 インストール 喚

ランサーのカードを地面に置き、魔方陣を展開

その魔方陣は青く光

姿を変えた

「イリヤ…何よそれ」

と、遠坂は絶句を表す

それはそうだ普通の小学生だと思っていたイリヤがランサーのカードを使い衛宮士郎のように使ったのだ

「イリヤ…」

美遊も絶句を表していたがそれは遠坂とは違う意味で絶句していた

「真名解放…」

と、言うとき高く飛び

ゲイ・ボルグを投擲をしようとしていた

そして魔力が集中しているのか、紅く光る
突き穿つ、死翔ゲイの槍ボ!!

セイバーに投げる

セイバーは剣で防ごうとしていたが消えかけていたでそして宝具を発動したので防げず直撃、爆発音と共に散っていった

「…」パタン

イリヤは姿を戻し、倒れた

「イリヤ?!」ダッ!

と、美遊はイリヤの所に飛んできた

「ミユ！早くなさい！」

崩れるわよ！」

「っ、はいー！」

と、士郎と、イリヤを連れて鏡面界を出た

「戻ってこれたわね…」

と、遠坂は更地になっていた周りを見渡し

更地では無いことを確認し

安心した

「そのようですわね」

と、ルヴィアも一安心した

「凜さん、ルヴィアさん、

お兄ちゃんと、イリヤはどうするんですか？」

と、姿を元に戻した美遊が問う

「そうね…明日は土曜日だし

私の家で預かるわ」

と、遠坂が名乗り出るも

「オーホッホッ！」

何を言うかと思えば

トウサカリンあなたの家は無くて?」

ルヴィアは遠坂に挑発する

もちろん家があることは知っているが何故か挑発してしまう

「家くらいあるわー！」

と、対抗する遠坂

しかし家の中は汚れているしと、思っている

「えーと、遠坂、ルヴィアさん、俺起きてるぞ?」

衛宮士郎は目を覚まし、否目を覚ましていた

「なんで…目を覚ますのかしらあッ！」

と、遠坂と、ルヴィアの攻撃を喰らうのであった

「なんでさアアアっ!？」

衛宮士郎は再度目を閉じたのであった

t o b e c o n t i n u e d …

第4話

「じゃあ行ってくる」

と、衛宮士郎は学校に向かう

その時、セラヤリズが出迎えてくれた。

ズキツ！

「っ！」

（くそっ、体が痛い

まあ、あの時、無茶な投影をしたしな…）

あの時、衛宮士郎は

偽・螺旋剣Ⅰと熾^ロ天覆^アう七^イつの円環^スを投影したのだ

それで逆に影響がなかったらおかしい

「てか、イリヤ大丈夫かな…」

今は衛宮士郎の妹であるイリヤスフィール・フォン・アインツベル
ンは37度の熱を出して休んでいる

——学校——

「…あり、…を使うとこれが出る

よし、次のこと問題、衛宮！解いてみる」

（あの時の、イリヤ

見た目的にはランサーのカードを使ったんだらうな…

だが、この世界のイリヤは一般人じゃないのか？）

「おい！衛宮！

二回目だぞ…」

「す、すみません…」

「たくっ、しようがない

遠藤解いてみる」

「おい、衛宮どうしたのだ。」

この前と言いい、最近授業中、ぼーっとしすぎだぞ
生徒会長として見逃せないぞ」

「ハハッ許してくれよ、一成」

と、そのとき

思いもしなかっただろう

まさか、来るとは思わなかった

ガラガラ

「おい、衛宮！」

廊下に衛宮を待つてる女子が居るぞ！

しかも結構な美少女だ」

「え？女子…？」

(俺の知り合いで、女子で、美少女…？)

「なあ、工藤。」

その2人はどんな見た目だ？」

「おお、よく2人ってわかったな

そうだな…三浦、特徴とか覚えてるか？」

「当たり前だよなあ？」

1人は黒髪で、もう1人は金髪だゾ

所謂、帰国子女ってやつか？」

「……なんでさ…」

—— 屋上 ——

「全く…来るのが遅いのよ。」

と、赤い悪魔遠坂は俺に言う。

しようがないだろ、来るとは思わなかったし。

それよりいるのは思わなかったんだ

「トウサカリンの言う通り、遅かったですわ」

と、ルヴィアさんは言う

今回は遠坂と意見があった様だ。

「それより、衛宮くん腕は平気かしら」

と、士郎の腕に関して聞く

まあ、あの時の俺の腕は何かしらの侵食を受けた。

今はそこまで侵食させてないが、いざずれば侵食が全身にまでまわり、自分が自分で無くなるかもしれない。

だがそれで俺がやらなかったら、イリヤや、美遊達が

俺がいない分やらなくてはならない

いや、それはダメだ。

イリヤたちに負担をかけるなら

おれがやった方がいい。

「ああ、平気だぞ。」

と、俺は遠坂に伝える

「…そう、ならいいわ。」

と、遠坂は言うが

多分感ずかれてるだろう。

「いや、そんなことを聞きに来た訳ではなくよ

また新しい、敵が現れましたの」

ルヴィアさんは伝える

残りはおよそ、バーサーカーとアサシンだ

バーサーカーでなければ勝算はある。

その時、遠坂は俺に伝える

「ちなみに衛宮くん

今回は事前情報は無いわ」

そうだ、今までがおかしかったのだ

わかるはずがない

まあそれはともかく、バーサーカーかアサシンかわからなくてはやばい。

「決行日は明日にするわ」

「ん？どうしてだ？」

イリヤたちは今休んでるが、美遊がいるじゃないか」

と、俺は聞く

あの時見る感じ美遊は平気そうだった

「今日は美遊も休んでいるですわ」

と、ルヴィアさんは俺に教えてくれる

ありがたいな。

「そうか、それなら明日だな」

キンコンカンコ以下略

放課後

「さようならー」

「気をつけろよー」

「よし、俺も帰るk…」

「か」と、言おうとした時に

「衛宮、今日は暇か？」

暇であれば、少し手伝って欲しいことがある」

「ああ、いいぞ？」

「うむ、かたじけない。」

生徒会室

「…つよし、

治ったぞ」

俺は一成に伝える、正確には直したんじゃない

応急処置だからな

「おお、済まない衛宮。」

と、一成は俺に礼をする

別にいいけどな

「ああ、だが結構年季が長いんだろうな

寿命を延ばしたただけだから早いうちに買い換えた方がいいぞ」

「う。うむ…部費を削らなくては…」ボソツ

「…じゃ、じゃあ俺もう、帰るぞ？」

「ああ、済まない衛宮」

俺はカバンを持ち生徒会長を後にした

ガチャバタン

「ただいま」

靴を脱ぐのに下を見る

もうひとつ靴があった

誰かいるのか？

「おかえりなさい、シロウ」

セラが玄関に来る

俺はセラに聞いてみた

「なあ、セラ今誰か来てるのか？」

「ええ、今イリヤさんのお友達が来てます」

(ああ、多分美遊の事だな)

「わかったありがとう、セラ。」

俺はセラに伝える

「いえ、平気です。」

俺は階段を上り自分の部屋に行く

その時

ガチャッ！

俺は目を点にした

そこにはメイド服の美遊と、それに襲いかかっているイリヤがいた

イリヤは

「お、お、お、お兄ちゃんッ!？」

と、凄く混乱している

混乱しているのは俺だぞ、イリヤ

そして美遊は

顔を真っ赤にして

何も言わない。

そこで俺は

「メイド服…似合ってるぞ?」

と、美遊に伝えた
がタイミングが悪かったのだろう

「シ、シロウ…!」

貴方というものは、イリヤさんのお友達にも口説くのですか!」

セラは何故かキレてくる

いや、なんでき

「セ、セラ!」

落ち着いてくれ!俺はそんなつもりはn:「女性を口説く人は皆そ

ういいうのです!」…なんでさあ…!」

この後、衛宮士郎は長い時間をかけて説教されたとき

めでたしめでたし…

「いや!めでたくないっ!」

5話

「敵もないし、カードもない。

どういうことですか?」

ルヴィアさんは呆れそうに言う。

それはそうだがカード反応がある場所に行つてなければ
そうなるはずだ

「場所を間違えたとか?」

イリヤは遠坂やったルヴィアさんに言う

「それは無いわ。」

鏡面界がこうして存在してる以上―

原因となるカードが間違いないどこかにあるはず」

「そっかあなるほど……」

と、イリヤは俯く

そしてイリヤは上を向く

「そういえば、なんだが空間が狭いような」

「カードを回収する事に歪みが減ってきている証拠ね。

最初の頃は数キロ四方はあったらしいわ」

「うへえ〜」

「嘆いていても仕方ありませんわね。

とりあえず、歩いて探しましょう」

「はぁーい……」

「――見つからないね……」

イリヤはルビーに言う

『なんか地味ーな作業ですねー』

「かもねえ〜」

『ここは魔法少女らしく、派手に魔力砲をぶっぱなして
辺りを更地ににするリリカルな方法を!』

「それは探索じゃなくて破壊だよ……」

と、イリヤはルビー俯きながら言う

「今こそ必殺のリリカル・ラジカル・ジエノサイドを〜」

「何それ……」

と、イリヤは言う

その時

ビュン!

「!」

「ん?」

イリヤと士郎が反応する

「みんな待ってくれ」

士郎はみなに言う

「どうしたの?衛宮くんはイリヤ?。」

「気のだと思うけど「危ない!」え?」

ガキンっ!

「え?ナイフ!」

そこに刺さっていたのはナイフ

「だ、大丈夫か?イリヤ。」

間一髪のところまで士郎がイリヤに刺さるはずだったナイフを弾き飛ばした

「敵がもう居たって訳!」

遠坂は士郎に言う。

「ああ、俺たちから見えなくて、そして奇襲タイプなら

多分、アサシンだ」

士郎はそう言う。

と、言った時に士郎は気づいた。

もう敵に包囲されていたことに。

「遠坂!ルヴィア!攻撃の準備をしてくれ!」

「え?ど、どういうこと?」ですの?」

「もう既に敵に、囲まれている」

「え!」

わ、わかったわ!」

と言うとルヴィアと、遠坂は宝石をセツトする

ゾロゾロ

「え……うそ。」

「嘘、でしょう?」

そりやそうなる、数多の数の黒化英霊が現れる

およそ50相当

「…クイツ

ばっ!

その時、黒化英霊はいつせいにナイフを飛ばした

(以降アサシン)

「美遊!」

と、ルヴィアさんは美遊に

「はい!」

「イリヤ!」

それに合わせて遠坂もイリヤに

「は、はい!」

「同調開始!」

と、いい士郎は轉身した。

「全速力…速射…!」

美遊はアサシンに撃つ。

何割かは倒せたが、まだまだ残っている

「フオ、砲撃!」

と、イリヤもアサシンに撃つ

アサシンが投げってきたナイフは遠坂と、ルヴィアが宝石を投げ、全

部、爆発させている

「投影、開始!」

と、いい愛用の双剣

干将莫耶を投影し、それで応戦する。

数分後

「はあ、はあ、はあ…」

士郎は1度も止まらず、戦い続けていた。

「これで…最後、砲撃！」

イリヤは魔力弾を撃ち、アサシンをたおす

だが、カードが出なかった。

「え…どういうことよ。」

遠坂はみなに言う

それはしようがない。

50体相当の軍勢を倒したにも関わらず、カードが出なかった
その時、遠坂の頭の中には最悪のパターンが浮かんだ。

ブウンっ！

「なっ！イリヤ！」バンツ！

「ふえ??」ドスツ

グサツ

「くっ、

うおっ！」ブンっ！

ザシユツ！

シユイイン

本当の最後のアサシンを倒したカードが出現した

「お兄ちゃん！」

美遊、イリヤは叫び、

「衛宮くん！」

「シエロー！」

遠坂と、ルヴィアは士郎の方に向かった。

『美遊様！鏡面界が崩れます！』

お急ぎくださいー！』

「わかってる！」

「お兄ちゃん…しつかりして…」

イリヤは泣きながら抱きつく

「イリヤ…今のお兄ちゃんにやったらダメ…」

と言いながらも美遊も士郎に抱きついている

「まだですの!?!トウサカリン!」

少しキレ気味に言うルヴィア

「急いでやってるちゅうの!」

と、遠坂はキレ気味に言う

傷は治ったが毒は完全に解毒できなかった。

「限界までやったけど…これ以上は無理よ…」

「じゃあどうしたら…」

イリヤは頭を抱える

「一応手段はあるわ」

と、遠坂は嫌そうな顔をして言う

「その手段というのは…」

イリヤは遠坂に聞く

その間、衛宮士郎は

???

「……全くだ、またもやここに来るとはな…」

アーチャーは呆れながら言う

「…うるせえ。」

「だが、イリヤスフィールを守るためにやられるとはな…お前らしいな」

「お前だったらどうしてたんだ…」

士郎はアーチャーに聞く

「…私なら、か…そうだな…」

もしかすれば衛宮士郎、お前と同じ手段を取っていたかもしれんな」

「……やっぱしか。」

と、会話していた時
しゅゆゆ……

「……またか

次こそ来るでないぞ、次またここに来た時は
貴様を殺る。」

「……そうかよ。」

——冬木教会——

side 士郎

「……目を覚ましたかね?」

「お前は……」

「そんなに慌てるな、連れを呼ぼう。」

と言うとそいつは外に行った。

ちよつとしたら、勢いよく、扉が開いた。

「「衛宮くん!」 シェロ!」 お兄ちゃん!!」

「遠坂……ルヴィアさん、美遊、イリヤ。」

と言うとすぐさまイリヤが

「ごめんなさい……私がよそ見してばかりにこんなことに……」

「いや、大丈夫だよ、イリヤ。」

気にしないでくれ」

「ごめんなさい、衛宮くん。」

私が見ていれば衛宮くんがやられるずに済んだ話なのに……。」

遠坂は泣きそうな顔でこちらを見ている。

「遠坂……」

俺は笑い

「大丈夫だよ心配してくれて、ありがとう。」ニコッ

「!」ドキッ

遠坂は顔を少し赤くし、顔をすぐに隠してしまった

数分後

「つて言うことで時間も時間なので解散よ
イリヤは私有家まで送ります。」

衛宮くん、今日はここで安静してなさい。」
と言うと遠坂はみなを連れて帰って行った。

「…なんですか。」

「何がだね?。」

つて、いたのか

「なんだね、

ああ、なまえをしらないようだな

私の名前は言峰綺礼だ。」

と、自己紹介する

「衛宮士郎だ。」

「衛宮…君は衛宮切嗣の息子かね?。」

と、俺に聞く

「!じいさんの知ってるのか?。」

「知っているも何も半年前に会ったさ」

無愛想ではあったが道案内をしてもらった。

これは何かしらの縁のようだ」

「…そうか」

と、言うとなんは横になり

寝た。

6 話前編

『ジャンプ、成功しました』

という声と共に鏡面界に入る

「狭いわね」

と、遠坂は呟く

それは同じ意見だ

「歪みが減つてきてる証拠ですわ

こここの一枚を回収したら、おそらくは……」

と、言いかけた時、

ドゴンツ

と、言う衝撃音が鳴る

そして柵の向こう側に敵、『バーサーカー』はいた

「」

「何……あれ……」

と、遠坂は言葉を吐く

「あれはギリシヤの英雄の一人のヘラクレスだ」

俺は淡々と説明する

「冗談でしょう……？」

ルヴィアさんが呟いたと同時に

バーサーカー
デカブツはこちらに向かって飛んできた

それを避ける

これを見るに本物のバーサーカーよりかは知性がないようだ

だか、パワーは変わらず

「お兄ちゃん、凜さん、ルヴィアさん!？」

と、美遊はそういうとカレイドステッキに魔力を貯め

「速射!!」
シユート

と、いい敵に当たるが

「全くの無傷だ」

「」

と、バーサーカーは斧剣を振り回す

「くっ、ふっ！」

美遊は攻撃を紙一重で避ける
ズサァー！

「なんてデタラメな腕力……！」

それと同時に

『絶対に直撃は避けてください』

物理保護でも守り切れません！』

「避けろと言っても……」

フィールドが狭すぎる……！

「逃げ場の無いここではあの突進力は脅威ですわ……！」

と、ルヴィアさんは「こんなことなら早いうちに潰しておくべきでしたわ！」と、言いたそうな顔をしている

「せめてあいつを足止め出来ないの!？」

遠坂は少し焦っているようだ

『無理です……！』

魔力砲も効いてる様子がありません

まるで、全て身体の表面でかき消されてるような……』

「あれは対魔力じゃない……」

もつと高度の守り……?？」

「まさか……！」

「宝具……!？」

『……間違いないでしょう』

おそらくは一定ランクに達してない

全ての攻撃を無効化する鋼の肉体……』

『それが敵の宝具です……』

「フッ！」

ルヴィアは宝石を飛ばす
それに合わせて凜も飛ばす

ドゴオオン！

「トレスオン
投影開始！」

と、弓を投影し

「我が骨子は捻じれ狂う」
I am the bone of my sword

「避ける！ 美遊！」

美遊は士郎の声を合図に避ける

「偽・螺旋g……」

と、言いかけた時、

ドクンッ！

「ウワアアアッ！」ザシユッ

腕から剣が生えていた

(これじゃあまるで……)

「あの時と一緒にじゃないか……！」ガクンッ

「お兄ちゃん!？」

「ランサー限定展開！」
インクルード

「ふんっ！」

という声と共に 刺し穿つ死棘の槍をバーサーカーに突き刺す

「よくやりましたわ美遊」

「はあはあ……」

!!美遊の息は荒れていた

「??????」

「??????」
「??????」

「ああっ！」

生きていた、否蘇ったバーサーカーに美遊は飛ばされた

ドゴオン！

「ガハッ」

「美遊！」

ルヴィアは驚いた

「なんてこと……！」

確かに心臓を貫いたはずなのに……!!」

(ありえない……!)

けどそうとしか考えられない)

蘇生能力!!

それがあの宝具の真の能力……!!

「撤退よ!」

凜は壁を破りそういう

「あんな相手じゃ勝ち目がない……!!」

「それに衛宮くんも重体

一度撤退して作戦を練るわ」

タツタツツ

「ビル内まで空間が続いてて助かったわ……」

「あの図体ならここまで入って来れないはずよ!」

と、凜は走りながら言っている

「ここでいいわ! サファイア!」

『はい、限定次元反射炉形成!』

境界回廊一部反転!』

「離界……」

「え……?」

ルヴィアの顔から血の気が引いた

『なっ……!』

ルヴィアと、凜、そして士郎が見たのはここまでだった

現実世界

「何をしているんですの!?!

美遊!」

と、ルヴィアは凄く怒っている

「落ち着きなさい! ルヴィア」

珍しく凜が止めに入る

「そして、改めてなんなの、これ……？」

と、凜が言っているのは左腕から刺さっている数多の剣だった

「ただでさえ傷を癒すのも専門外なのに

こんなの、治せないわよ……」

凜は頭を抱えている

と、その時助けが来た

「なら、私に任せたまえ凜」

「！ あ、あんたは綺礼！

どうということよ……？」

「このとおりだが？ 凜」

と、言峰は少し煽るかのように凜に言った

「不本意だけど……わかったわ

任せたわ」

と、言うトルヴィアと、凜は走ってイリヤを探しに行った

「と、その前に」

と、凜は士郎のポケットからアーチャーのカードを回収した

「なんだね？ それは」

「アーチャーのクラスカードってやつよ

衛宮くんこれを持たせてたのよ」

「そうか、まあいい」

「ん、ここは……」

士郎は目を覚ます

が、そこは鏡面界ではなく

冬木教会だった

「目を冷ましたかね」

「言峰綺礼……s……」 「ふつうで構わない」 え？」

「どうということだ……？」

士郎は目が覚めたばかりなのか何言っているのかわかってない状況だった

「その通り、呼びやすい通りでも構わないということだ」

「そうか……じゃあ、言峰」

「……それはいい、衛宮士郎、左腕を見ろ」

言峰に促され

左腕へと視線を落とす

「聖骸布……？」

「ほお、これがわかるとは

衛宮士郎、お前も違う世界からこの世界の同一人物に現界したのか」

「まさか、お前もか……？」

「まさしく、では話を戻すが

この聖骸布をお前の左腕に巻いた

それで魔力の暴走に抑えた

衛宮士郎、お前が暴走した場合私がお前を殺す」

士郎は言峰の言葉にゾツとした

言峰なら、本当にやりかねないと思ったのだ

「傷もあらかた治した

すぐに向かうがいい」

「言われなくても」ガチャバタン

士郎は冬木教会を後にした

6 話後編

一方その頃美遊は、

『美遊様!?!』

一体何を……!』

サファイアは驚いていた

美遊のやっていることがわからなかったのだ

「これでいい

ようやくひとりになれた……」

『美遊様……!?!』

「見られると……」

「まずいから……」

と、美遊はセイバーのカードを出した

「秘密……ね」

『カード……?』

サファイア美遊の今までと違う使い方疑問を抱く

「……どうして出来たのかは分からないけど

以前イリヤがやってみせた」

「これが」

「カードの本当の使い方」

と、美遊が言うとカードを地面に置き

魔方陣が発動する

「———告げる!」

「汝の身は我に!」

「汝の剣は我が手に!」

「聖杯の寄るべに従いこの意この理に従うなら答えよ!」

と、ここまでの節を読んだところでバーサーカーが現れた

『!!』

『美遊様、敵が……!!』

「誓いを此処に!」

美遊はそれを気にせず詠唱を続ける

「我は常世総ての善となる者！」

「我は常世総ての悪を敷く者！」

「汝三大言霊を纏う七天！」

『美遊様!!』

「抑止の輪より来たれ

天秤の守り手よ!!」

「夢幻召喚！」

この詠唱で美遊の姿が変わった

「撤退はしない」

纏っている鎧が鳴る

「すべての力を持って」

「今日」

「ここで」

「戦いを終わらせる!!」

ザシュツ!

美遊バーサーカーの手首から先を切り落とした

ドスツ!

「はあ、はあ、はあ」

バーサーカーは美遊に押され

壁まで追い込み、心臓に剣を刺す

そしてそのまま上に切る

『み、美遊様!』

サファイアの声が聞こえた

「サファイア?」

驚いたその状態になっても喋れるんだね」

『一体何が起こっているのですか!?!』

『美遊様の格好と戦闘力、まるで……』

『通行証カードを介した英霊の座への間接参照……』

「クラスに応じた力の一端を自身の存在に上書きする

擬似召喚」

と、美遊は冷静に言う

『え、つまり……』

サファイアは察した

「英霊になる

それがカードの本当の使い方

その時

ドクンッ!

メキメキ……

「話はおしまい

敵が起きる」

『2度目の蘇生……!』

美遊様! 敵はやはり不死身です!』

と、困惑しながらサファイアは美遊そう、伝える

「無限じゃない

自動蘇生オートレイズなんて破格の能力

絶対に回数はある」

何度、蘇ろうとも

その全てを打倒する!

と、意気込み特攻をするが効果がない

「?????!!」

「ドスンっ！」

バーサーカーは美遊に攻撃を与えた

「ぐっ……!」

『美遊様……』

刃が通らない……

明らかに固くなっている……

『まさかこちらこうげきの体制がつけている。!』

『美遊様!』

お願いです! 撤退来てください!

このままでは必ず……』

と、言いかけたところ

剣に魔力を纏わせる

「撤退は……」

《しない!! / b》

『美遊様……どうしてそこまで……』

『美遊様!』

どうして撤退を拒むのですか!

今日がダメでもまた次に態勢を整えて……!』

と、美遊に提案するが

「次じゃダメ!」

今ここで終わらせないと……」

「私ひとりで終わらせないと……」

美遊は歯を食いしばって

「次はイリヤが呼ばれる！」

という美遊の決意にサファイアは黙ってしまった

「イリヤはもう戦いを望んでない」

と、美遊は言う。剣を構え

魔力を溜める

「束ねるは星の息吹」

宝具を打つ体勢に入る

輝ける命の奔流。受けるが良い！

『約束された勝利の剣』！』

と言うと剣、否、聖剣からビームのようなものが出てバーサーカーを貫く

「はあ、はあ、はあ」

美遊は完全に魔力切れだった

そして魔力が切れた影響で夢幻召喚も解けた

「くっ、」

『変身が解けた……？』

美遊様!?!』

サファイアは美遊から離れた

「戻って！ サファイア！」

すぐに魔力供給を……！』

美遊は咄嗟の判断で

サファイアにこちらまで来るように指示をした

『は、はい……！』

と、言い、動こうとした途端

バーサーカーが蘇りサファイアを抑える

『み、美遊様……！』

まずいますい

《b》まずい——ッ！

うそ……

こんな……

こんなところで……

「……………ッ!!!」

と、その時正義の味方は現れた

「よく耐えた、美遊」

聞きなれた声が聞こえた

その声は優しく、1番聞きなれたと言ってもいいくらい、聞きなれた
かった

『バサバサバサバサ』という布の音と共に現れたのは

衛宮士郎だった

「俺の後ろに居てくれすぐに終わらせる」

と、言うとき士郎は目にも見える速さでバーサーカーに向かった

「ト レー 投影、開始」

「ト リ ガー オ 投影、装填」

と、言い聖骸布を巻いた腕に魔力を通す

——「全工程投影完了——是、射殺す百頭！」《セットナインライ
ブズ・ブレイドワークス》

そこに投影されたのはバーサーカーが使っていた奴と全ておなじ
武器だった

「ウオリヤアアアッ！」

その一撃に見える攻撃の中に八撃入った

バーサーカーは八回死んだ蘇った

「これでも死なないか……」

バーサーカーは生きていたがすぐには動けなかった

「仕方ない……」

と、士郎は再度立ち上がり

「遠坂！ 今だっ！」

と、言うとき

「Anfang!」

と、凜は数個の宝石をバーサーカーに投げる

「Zeichen!!」

【グレイプニル!!】

「通った……瞬間契約テンカウントレベルの魔術なら通用しますわ!」

「あはははは!!」

大赤字だわよ! コンチクショー!」

と、凜は嘆いている

「イ、イリヤ……」

どうしてここに……」

「ごめんなさい」

イリヤは美遊に謝る

「わたし——バカだった

なんの覚悟もないままだ言われるように戦ってた」

「戦ってもどこか他人事だったんだ

こんなウソみたいな戦いは現実じゃないって……」

「なのに……」

「その「ウソみたいな力」自分にもあるってわかって……

急に全部が怖くなって……」

イリヤは涙を流しながら美遊に言う

「イリヤ……」

美遊はイリヤの名を呼んだがその上におい被さるかのようにイリ

ヤが喋る

「でも」

「本当に馬鹿だったのは」

「逃げ出したことだ!」

どんな経緯だったとしても

関わった人をなかつたことにはできない

「友達を見捨てたままじゃ

前には進めないから…ッ！」

と、言うイリヤの声と共に『キイイイン』という音が聞こえてくる

「あっ……!?!」

美遊の反応の通り

「これは…」

(ステッキが共振している…?)

「うん、できるよ二人なら、」

今の私にはそれがわかる